

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2024年3月8日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 71号



麗澤中学一年生の夢を育んだ上ノ原(10月25日)

目次

- 10月中旬～2月の活動報告(事務局).....1
- 2023定例活動⑥.....2
「茅刈り」
◆開催報告(草野 洋)
◇感想文(吉田 裕一)
- 2023 定例活動⑦.....4
「茅出し・山の口終い」
◆開催報告(藤岡 和子)
- 麗澤中学校奥利根水源の森フィールドワーク.....5
◆開催報告(藤岡 和子)
- 流域連携活動報告.....8
「小貝川の野焼き」「菅生沼の野焼き」
◆参加報告(稲 貴夫)
- 楽習会「平沢官衙遺跡茅葺き見学会」.....9
◆参加報告(稲 貴夫)
- 藤原だより(北山 郁人).....9
- こもんずの広場(笹岡 達男).....10
編集後記

2023. 10～2024. 2の活動報告

【10月】

- 25日 麗澤中学1年生147名による奥利根水源の森フィールドワークを実施。青水関係者14名がインストラクターとして指導にあたる。
- 28、29日「茅刈り」実施。22名が参加。合計130ボッチ(65束)の成果。
- 28日夜は、車座講座として東京工業大学塚本研究室の平尾しえなさんから、全国茅場行脚の成果を披露いただく。
- 30日、31日 有志6名で茅刈自主合宿実施。106ボッチ(530束)の成果。他にも、地元茅刈衆2名(260ボッチ)および自伐林業グループ4名(43ボッチ)が茅刈を実施。

【11月】

- 3日～5日 有志4名にて茅刈自主合宿実施。96ボッチ収穫。その他含め、総計657ボッチ=3285束の収穫となる。
- 15日 『茅風』70号発行
- 18日、19日 「茅出し・山の口終い」実施。茅の納入先であるつ



くば市文化財課の石橋充課長を含め、23名が参加。みなかみ市環境課の高橋輝次長からも、はじまりの式で挨拶をいただく。

- 18日夜、車座講座では、つくば市の石橋さんから国指定史跡平沢官衙遺跡について、上原さんから孀恋の自然環境について解説いただく。

【12月】

- 12日 イオン環境財団第1回里山フォーラムに草野事務局長参加。

【1月】

- 20日 流域連携の一環として、小貝川の野焼きに9名参加。
- 28日 同じく流域連携として、菅生沼の野焼きに7名参加。(雨天予報のため、21日の予定を一週間延期して実施)

【2月】

- 3日 赤谷プロジェクト20周年記念報告会が、みなかみ町カルチャーセンターで開催。北山塾長、草野事務局長が参加し、塾長が塾の活動とプロジェクトとの連携などを発表。
- 4日 つくば市・平沢官衙遺跡で楽習会開催。上ノ原の茅が使われている土倉の葺き替え工事を見学。11名が参加。

■2023定例活動⑥「茅刈り」

—ボランティア・合宿・茅刈衆のチカラ結集—
報告 草野 洋

記録にも記憶にもない今夏の異常な暑さと降雨の少なさは、人々の生活にも大きな影響を与えたが、この異常気象は植物たち、上ノ原のススキにも影響して近年にない生育不良となった。草丈、茎径ともに例年に比べ見劣りがする。雑草は繁茂し、ススキの色ももうひとつで「地球はどうなってしまうのか」と、ススキも嘆いているようだ。温暖化が急速に進んでいる。



10月28日、29日に実施した今年の茅刈は、茅場の中で比較的ススキの生育が良くて雑草が少なく、且つまとまっているところを注意深く探しながら刈るという、自然の恵みに感謝しながらも、例年よりもススキの状態に心を痛めながらの茅刈となった。

1日目、募集に応じて22名が上ノ原に集結、今年の特徴は、ヨーロッパからの留学生2人を含む東工大グループをはじめ、20代の若者が多く、上ノ原の茅場は活気に溢れた。



始まりの式のあとは、雲越萬枝師による茅刈講習。その称賛す

べき技術はもとより、気の利いたジョークを交えた指導を聞くのも楽しみだ。作り上げたボッチを指して、「これなら大阪万博に出しても恥ずかしくない」との一言が効いた。

鎌研ぎ終わり、それぞれが刈り始める。

上 茅刈り講習
中 ボッチを抱きしめる萬枝師匠
下 鎌研ぎ



左上 ベテランが初心者を指導
左下 刈れば日本の屋根が蘇る



生育のいい場所を探しながら刈るので、なかなか能率が上がらない、1時間ほどで2ボッチ刈ったところで巡回してみると、やはり「茅が小さい」との声が多い。ついでに茅場全体を回り、茅刈合宿時用に、比

較的生育が良くまとまっている場所に目星をつけておく。その後2ボッチを作りあげたところで3時の休憩。広場にもどると岡田さんの野点の準備が出来ていて、お菓子と一緒にいただく。おいしいお茶を茅場で堪能出来る幸せ。いつも有難うございます。

この後も巡回、1ボッチを刈ったところで本日の作業は終了。皆さんに出来高数に応じたボッチ券を配ると本日のボッチ数は60ボッチだった。



野点で疲れも吹っ飛ばす。作法に則り小首をかき上げる？

本日の宿は、料理に定評のある民宿「とんち」。夕食後の車座講座は、東京工業大学の大学院生、平尾しえなさんから、全国茅刈行脚などの話を伺った。上ノ原はもとより阿蘇、長野開田高原(カリヤス)、御殿場、大阪(淀川)、筑波、沖縄(ササ)などの全国で茅刈をしている強者。今回はヨーロッパの茅葺の話も交えながら、各地の茅場の特徴を話していただき、大変勉強になった。建築が専門である彼女の「家は買うものでなく作るもの」との言葉に、おおいに同感。

そして2日目。天候もまずまずで、1日目に生育のいい場所を把握できたためか能率が上がり、全体で70ボッチ、2日間で130ボッチ(650束)の成果を得て、無事に終了した。

終了後、お米、マメ、野菜などの地元産農産物が移動販売車で到着。参加者はボッチ券を手にとり新鮮な野菜などを購入、たちまちのうちに完売した模様。

今年の茅は昨年に引き続き、つくば市の国指定文化財「平沢官衛遺跡」の土倉の屋根の葺き替え用として嫁入り先が決まっている。目標の600ポッチ（3000束）を目指し、条件の悪い中、参加者にはよく頑張ってもらった。残りは第1陣、第2陣の合宿組、そして地元茅刈衆の頑張りで、目標を達成することになる。

その茅刈合宿。第1陣は29日7人（午後）、30日6人、31日（午前中）3人が従事した。さすがベテランぞろいで成果は100ポッチを超えた。

第2陣は11月3、4、5日に6人が茅場に入り、これも100ポッチを超えたので、2回の合宿で200ポッチ（1000束）を超えることができた。



合宿第2陣メンバー きえすぎくん(杉のボード)も活躍



これに昨年、2200束の実績を誇る雲越萬枝さん、渡邊勇三さんの地元茅刈衆による成果を得て、上ノ原の茅場には600ポッチ以上が林立し11月18、19日の茅出しを待つことになった。

参加者感想

「茅刈りからの学び」

吉田 裕一

今回初めて茅刈りに参加させていただいた建築家の吉田です。

2022年9月に千葉県鴨川市釜沼集落の古民家ゆうぎつかにて茅葺きを体験し、その際に上ノ原の茅も使わせていただきました。初めて茅を自分の手で扱ってみてなんて素晴らしい材料なんだろうと思ったものの、身の回りに茅場もなく、どこでどんな風に育っているのかわからないままだったので、今回お誘いいただき、念願がかないました。初見でまず紅

葉を背景にしたあたり一面ススキの風景は圧巻で感動しました。

実際に刈ってみて最も難しかったのは、ススキと雑草を見分け、雑草が入らないように刈ることでした。お手本を見せていただいた時は簡単に刈っているように見えてましたが、それがいかに高度な職人技であるのかを自分もやってみて思い知りました。シンプルな動きの中にススキと雑草を上手く分けることや、刈りやすい位置にススキを持ってくる身体の入れ方だとか、最小限の力で素早く刈る手の動きなどが無駄なく入っており、どうやったらそんな風に刈れるのかを自分なりに模索しながらの作業でした。

没頭して刈るうちに目や手がだんだんススキと雑草をうまく分けられるようになっていき、2日間の作業の間に少しは上達したかなと思います。茅刈りは自分の背よりも高いススキに囲まれるせいか、茅と自分だけの世界に入り込んで没入感がすごく、「カサカサ」、「ザッザッ」とススキの擦れる音や、鎌で刈る音のみがする世界はとても心地良かったです。

また、刈ったススキをまとめる時、ポッチにする時にもロープの類は使用せず、ススキをススキで縛ってまとめる方法で、ゴミの出ない作業の工夫に感心しました。

私たちは普段便利さに甘えてかつては当たり前のように日常生活の一部だったことを外部に委託し、サービスのみをお金で買うような生活になってしまいがちですが、地球が授けてくれた恵みに目を凝らし、自分の頭や手を使って生活していく術を少しでも取り戻す必要があるのではないかと最近考えており、茅の一連のサイクルにも多くの学びがあります。建築家として茅葺きという工法を受け継ぐと共に、茅を育て、刈り、野焼きをするといった、人の営みと自然のサイクルを調和させた大切な習慣も共有し、少しでも携わりたい人が増えるよう、活動していきたいと思います。



■2023定例活動⑦「茅出し・山の口終い」
 -今年もつくば市・平沢官衙遺跡の屋根材に-
 報告 藤岡 和子

11月18日、19日に、今年の茅出しと山の口終いが行われました。

茅出しは、上ノ原入会地の仕事納めです。10月28日から刈り始めて3週間、草原の彼方此方に散らばって立っている茅ポッチを、作業道や公道に集める体力を使う仕事です。

仲間が上ノ原に集うと、一面に広がるは、息を呑む太陽に輝くポッチ風景。茅出し作業の爽快感を十分に味わえると思われたのですが、、、。



茅場に近づく怪しい雲
 雪の降る中で茅出し
 下は雪の止んだ上ノ原



いざ作業を開始すると、あれよあれよと天候が急変。粉雪が降り始め、徐々に綿雪吹き荒れる中の作業となりました。それでも、みんなのやる気で15時30分には、刈り取ったポッチを道に集めることが出来ました。ご苦労様です。



翌日は、青空と雨が交互に繰り返す天気。冬がそろそろ始まるそんな気配漂う日でしたが、トラックにポッチを積み込みました(写真・下)。途中虹が現れ(写真・右段上)、その素晴らしさを味わう小休止もあり、無事に作業を終了しました。



【山の口終い】

十二様へ、入会地の恵みを戴いた感謝と一年無事に作業できた御礼のお祭りです。直会では、自然と人間と神が、同じお供えのお神酒をいただきました。

すべては繋がっている
 どれが勝るでもなく共存し
 互いに慈しみ
 来年も
 孫の代へも
 その先まで続いていく
 上ノ原入会地でありま
 すように

和子

十二様で山の口終い
 下はお供え物



【車座講座】



車座講座は、茅刈りに続き参加のつくば市・石橋さんから「平沢官衙遺跡」(写真・左)、上原健さんから「孀恋の自然環境」についての話を伺いました。

◇茅出し数最終結果◇

トラックに積み込み、今年の茅刈数が確定しました。

・ボランティア	660 束 (132 ポッチ)
・茅刈衆 (2人)	1,300 束 (260 ポッチ)
・合宿	1,025 束 (205 ポッチ)
・自伐組	225 束 (45 ポッチ)
合計	3,210 束 (642 ポッチ)

今年の嫁入り先は、昨年につき、すべて古代筑波郡の正倉であった『平沢官衙遺跡』に運ばれました。

■麗澤中学校「自分(ゆめ)プロジェクト」
— 奥利根水源の森フィールドワーク —
報告 藤岡 和子



上ノ原の木々が色とりどりに染まった秋麗の10月25日、私立麗澤中学校1年生の『自分(ゆめ)プロジェクト』奥利根水源の森フィールドワークが、森林塾青水の活動の場である上ノ原茅場入会の森で行われました。

自分(ゆめ)プロジェクトとは、麗澤中学校・高等学校の6年間を通して、麗澤教育が大切にしている**感謝の心・思いやりの心・自立の心**を育てるプロジェクトです。3つの心を育むために、様々な体験や実践を通じて自分のことを真剣に考え、関心・適正・能力を探り、自己理解を深めていきます。その第一歩が、中学1年生の自分(ゆめ)プロジェクト『奥利根水源の森フィールドワーク』です。生徒ひとりひとりの自己理解へと繋がっていけるよう、5月の学校の敷地を巡る五感での植物観察と合わせて、森林塾青水がインストラクターとして関わっています。

昨年よりテーマを「リアリティ～直に触れ感じる～」して、すべてが気づきであり知恵になると考え、遊びと学びを分けない心身全体に働きかける「遊学」を導入しました。生徒たちは、一日を通して3つのプログラムを体験します。3つのプログラムが繋りあるひとつの流れとして感じられるように、各プログラムに関連性のあるタイトルをつけました。また、昨年の子どもの様子から分析し、より心が癒され、たくさんを感じ取っていけるように再構成しました。生徒たちは、教室と異なる観点から学んでいきます。

【プログラム】

- ・ 自然と暮らし～雲越家古民家見学～ 30分
- ・ 自然と仕事～茅刈り体験～ 70分
- ・ 自然を感じる～観察・遊び・ヒーリング～ 140分

<準備>

前日の10月24日、インストラクターは、上ノ原に集まり子どもたちを迎える準備をしました。まず、事前に伝えていたインストラクター心得の捉え方のポイントを、作成者藤岡から解説し、意図を共

有しました。その後、フィールドを散策しながら枯れ木撤去や、スズメバチが飛翔していないかの確認をしました。途中、目隠しトレイルのコースも選び、3ヶ所にロープを張りました。前日にインストラクターが下見をすることで、子どもたちにどこで何を伝えてゆくか、プログラムの進め方を考えることができます。当日戸惑うことの無いよう、子どもたちが安全に自分を解放できるよう、綿密な打ち合わせを行いました。

10月25日朝、五感植物観察から半年、子どもたちは、どんな成長を見せてくれるでしょうか。ドキドキしながら上ノ原で待っていると、中学1年生147名がやってきました。さあ、上ノ原茅場入会の森フィールドワークの始まりです。

<自然と暮らし> 国指定重要有形民俗文化財『雲越家住宅資料館』見学

豪雪に耐え厳しい山村生活を送っていた藤原の人々の歴史を、今現在も葺き替えている茅葺き古民家の中で、実際に使われていた生活用具に触れながら学びます。

今年、古民家見学初の試みとして、囲炉裏で火を焚きました。子どもたちは、それ急げと民家の周辺で焚き木を拾って、戻っては焚べ、またひとり戻ってきては焚べています。先人の生活の一部分を自ら楽しんでいる子どもたちの姿を見て、説明を担当した藤原の若夫婦も嬉しい気持ちになったと話して下さいました。

子どもたちは、民家の中で火を焚くとどのように煙が昇り、天井に届くのか。この煙が、柱・梁・屋根に煤を纏わせ、防腐殺菌作用が働いて、日々の暮らしが丈夫な家に育て、家の安心安全を作っていくことを直に感じたのでしょうか。語りだけでは伝えきれない先人の知恵を体から学んでゆきます。

<自然と仕事> 茅刈り体験

上ノ原の入会地、秋の仕事のひとつ茅刈りを体験します。先人たちは、茅を刈ってから一軒の家の屋根を葺くまでの作業を、集落の共働で行って来ました。遊学の考え方のひとつに『他者と共感的世界の実感』があります。茅刈り仕事しかり、先人たちは、暮らしの中で遊学していたのです。

さて、子どもたちはというと、
「もっと刈らないと縛れないんじゃない」
「あっちのほうがよさそうだよ」
「あれ？刈れないんだけど、どうやってるの？」
と、クラスメイトと共働しているではありませんか。自ら他者と共感的世界を築いています。こういった経験が、現代の子どもたちに不足していると、茅刈りをしている姿を見て感じます。

なぜそう感じるのでしょうか。殆どの子が、鎌でスキを叩いています。『鎌は引くから刈れる』と、実演しながら言葉でも伝えませんが、鎌を引いている

つもりなのでしょう。けれども、叩いているのです。普段の学習スタイルが、文字・写真・映像といった、二次元で構成されている中、急に『見て習え・体で習え』と、リアリティを求められてもどうしたら良いか分からないのだと思いました。それでも子どもたちは、茅刈りを楽しんでいました。

「刈っていたら穂が舞ってキラキラ綺麗だった。」

「鎌を研ぐシャッシャッシャの音が気持ちよかったです。」

と、教えてくれました。

<自然を感じる> 観察・遊び・ヒーリング

自然を『感じる』には、意識を解放することが鍵となります。子どもたちに「今から自然を感じましょう」と言葉だけで伝えても、『やっているつもり』になってしまうことが推測されます。そうならないよう、自然と意識を向けていけるプロセスを踏んで、体験のためのワークを行いました。

【プロセス】

① 導入＝人を感じる

- ・自分を感じる(呼吸 心音)
- ・相手を感じる(二人組背中合わせ)
- ・相手との関わりを感じる(押す もたれる)

② 散策

- ・自分の暮らす環境と上ノ原の環境を比較
- ・入会地の活用、持続可能な資源
- ・水はどこから来るのか 水源の森

③ 自分と自然

- ・好きな自然物を探す
- ・選んだ自然物を感じる(呼吸 触感など)
- ・自分と自然物との関わりを感じる(押す もたれる)



④ 目隠しトレイル

樹木間をロープでつなぎ目隠しをして辿りゴールまで進む



リアリティ溢れる体験を作り出すためには、インストラクターの心に余裕がなければなりません。そのために、プロセスにはたくさん余白があります。インストラクターは、子どもたちがどのように感じているか、その時々反応を敏感にキャッチします。そして、子どもたちとの関わりの中から伝えたいこと、気づいて欲しいことを見出し、意識

が解放されるよう導いていきます。それでは、どう子どもたちが解放したのか、そのほんの一部をお伝えします。

木を味わう

人を感じるワークをキハダを中心に囲んで行い、その後キハダに触れました。樹皮に虫や菌を見つける子もいれば、舞い散る木の葉に気づき、木を見上げ手を高く伸ばし、葉を捕まえようと、左へ右へ行ったり来たりしている子もいます。そういえば、人を感じるワークで心音を感じているときに、風で舞う木の葉の音が聞こえたと教えてくれた子がいました。そんな子どもたちの様子を見ながら、樹皮を少し剥いで黄色い木の内側を監察します。舐めてみたい希望者を募り「せーのっ！」で一斉に舐めました。「苦〜」チャレンジした子のほとんどが渋っ面や苦笑いの中、「おいしい」と、笑顔で30分位口に含んで味わっている子がいました。



感動を伝える

ゆるぶの森を抜け、草原に出た瞬間、「わあ」と、歓声が上がりました。「この景色持って帰りたいなあ。そうだ。先生に撮って貰えばいいんだ。」男の子は、先生にお願いすることにしました。「先生、そこじゃありません。もっとこっち。そうそう。あの山のあの感じを入れてください。」カメラを覗き込みながら感動した景色を細かく伝えています。満足いく一枚が撮れて、ニコニコしていました。

秘めていたリアリティ

目隠しトレイルが終わると、次はいつ遊べるかが気になる子どもたち。蔓が絡まる雑木林に着いたところで「ここで遊ぼう」と、遊びの時間を取ることにしました。すぐに子どもたちは、インストラクターが見える範囲で三々五々に散り、雑木林内は、ワイワイキャッキヤと子どもたちの声で満ちていきました。



「この子たちこんな風に笑うんだあ。」
 子どもたちを見守っていた先生の口から漏れました。
 「どうしました？」
 インストラクターが尋ねると、
 「学校では見たことがない顔で笑っているんです。こんないい顔初めてみました。」
 そう話す先生。自然が子どもたちを解放させ、秘めていたリアリティを引き出したのだと思いました。



感覚の実行

すべての行程が意識の解放を生んだわけではありません。散策中、山道で息が上がり苦しくなっても、決してマスクを外さない子が数人いました。マスク着用は任意ですが、酸素を取り込みたい自分の体のSOSに気づけないか、もしくは思考がそうさせているのかもしれません。自分で判断できなくなっている子どもたちがいたことは事実です。この4年間でそうさせてしまったのは、社会そのものだと感じました。

フィールドワークの最後に、わたしが担当させていただいた子どもたちへ、今日が特別な体験ではないというお話をしました。

「始めに自分の体を使って相手を知りました。次にそれを気に入った自然物と行いました。茅刈りでは、体を使って昔の人の仕事を知りました。今日行ったこと、そこから見えてくるもの、気づいたことのすべてが繋がっています。今日、考え感じたことは、街に帰っても日々考えることの根っこ、基盤になることかと思います。気持ちがいいと感じる。それはなぜだろう？ 疲れたと感じる。それはなぜだろう？ 嫌だと感じる。それはなぜだろう？ 『なぜ』と感じること、疑問に持つことは知りたいという欲求

の現れです。たくさん気づいて『なぜ』に出会ってください。そこから学んでいくことが、みんなひとりひとりの知識として実っていくのだと思っています。今日は、みんなと過ごせてとても楽しかったです。ありがとう。」

一日の終わり、子どもたちに「今日どうだった？」と尋ねると、一人の女の子が叫びました。「全部楽しかった。全部綺麗だったあ。」
 また来年、どんな子どもたちに出会えるのでしょうか。



■流域連携活動報告

小貝川 & 菅生沼の野焼き

報告 稲 貴夫

小貝川の野焼きは、希少植物の保全を目的に、地元の「自然友の会」が協力団体に呼び掛け実施しているもので、今年1月20日(土)に開催され、青水から9名の会員、会友が参加しました。

当日は主催者、来賓の挨拶やオリエンテーションに続いて、第一地区から順番に防火帯をめぐらした後に火を入れ、昼までの間に予定していた三箇所の野焼きは、無事に終了しました。

第一地区は一番面積が広く、背の高いオギやヨシが生い茂っている区域です。火が勢いよく野をなめて行きました。

第二地区は、ヒメアマナの生育する藪状の区域で、3月31日に観察会が予定されています。

第三地区は、タチスミレの生育する区域ですが、林内を野焼きするため、一本一本の立木の周囲の草も刈り払った上で、火を入れました。

■つくば市・平沢官衙遺跡で学習会
上ノ原産の茅による葺き替え工事を見学
報告 稲 貴夫



左上の写真は第一地区、
下は第二地区

今年の野焼きにあたっては、対岸の地区より、降灰などに対する対応の要望が寄せられていたとのことですが、主催者側が野焼きの時間帯に現場で区長さんと一緒に視察した結果、原因は別にあることが判明し、その真摯な対応が逆に好感をもって迎えられたとの嬉しい報告もありました。

菅生沼の野焼きは、小貝川の翌日の 21 日に実施の予定でしたが、この日は低気圧の通過による大雨の予報が出されていたため、主催者は事前に延期を決定。一週間後の 28 日に実施されました。予定の変更で参加出来なくなった方も出ましたが、当日は青水から 7 名が参加しました。

約 80 名の参加者が、刈払機や熊手、レーキを手で一時間ほど汗を流して作業をすると、幅約 5 メートルの防火帯が出来上がり、野焼きの準備は整いました。風向きを考慮して、仮設の防火帯で十字形に 4 箇所



に区切られたヨシ原に順番に火を入れると、小さな火はいつのまにか大きくなって炎と黒煙は様々な形に変化しますが、それもつかのま、あっというまに火が消えた後には末黒野が残りました。

菅生沼はタチスミレの生息地で、野焼きの効果で回復してきたものの、ここ数年、減少傾向がみられるとの報告が、野焼き終了後にありました。その対策としては、野焼きの頻度や土壌の掘り起こしなど、タチスミレの生育環境について、新たな観点からの研究も進められているとのことでした。



尚、博物館では、菅生沼のタチスミレ見学会を、5 月 19 日に予定しています。(詳しくは博物館 Web サイトで)

**コハクチョウの
飛来する菅生沼**

2022 年度と 2023 年度の二年にわたり、上ノ原で刈り取られた茅、合計凡そ六千束が、茨城県つくば市の平沢官衙遺跡に建つ、復元土壁双倉の茅屋根の葺き替え工事に使用されています。森林塾青水では 2 月 4 日に、つくば市の主催で実施された見学会に塾長他 11 名が参加しました。

国指定史跡である平沢官衙遺跡は、奈良・平安期の筑波郡の郡役所跡で、昭和 50 年の県営住宅建設工事に際して発見され、その後発掘調査と復元整備工事が進められ、平成 15 年に、「平沢官衙遺跡歴史ひろば」として正式に開園しました。



復元建物群の遠景 後方に筑波山

史跡周辺の地域は日本百名山の一つ、筑波山の参詣道の入口にあたる古くからの観光名所です。参加者は午前中つくば駅に集合し、市営バスの「つくバス」に揺られて史跡西側の北条地区に移動、昼食前に、かつて醤油製造業を営んでいた「宮清大蔵」という江戸時代末に建てられた登録文化財の建物を見学してから、歩いて平沢官衙に移動しました。

史跡に到着すると、昨年の茅出しに参加いただき、車座講座で遺跡についてお話しいただいた、つくば市文化財課の石橋充課長より、今度は実際に現場を見ながら解説いただきました。(写真・右)

三棟ある復元建物は、かつて稲を保存していた正倉で、萱葺きの土倉双倉の右側は校倉造り、左側には板倉造りで復元されています。参加者は校倉造りの木組みの実際を、模型を使って体験することができました。(写真・右)



続いて、実際に屋根に上がり、現場で茅葺き工事の現場を見学しました。茅葺き文化協会の事務局長であり、(株)里山建築研究所のスタッ





写真・上 職人さんから葺替
工場の説明を聞く

写真・下 茅葺屋根の軒下
下側が霞ヶ浦の細いシマ
ガヤ、上側が上ノ原の茅



茅を刈り、雑草を極力取り除いて、定められた太さにしっかりと束ねることが大切だと理解しました。

史跡全体の整備は令和8年度まで続くとのことですが、土倉の茅葺き工事は、令和7年3月竣工予定です。その時は、大勢でお祝いに駆け付けたいと思います。



フとして現場の施行管理を担当している上野弥智代さんや、工事に従事している職人さんから話を伺いました。今回の工事には上ノ原のほか、地元つくば市の高エネルギー加速器研究機構はじめ、県内数か所から茅を調達しているとのことです。

一番気になるのは、上ノ原産の茅の「品質」ですが、いろんな太さの茅が混じっていても、それぞれ使う場所によって適した太さは異なるので、現場で選別して「適材適所」で使っているとのことでした。

「刈る側」としては、一本一本の太さにあまりこだわること無く、萬枝師匠の言うように、穂の付いた真直ぐの

左上 高床の床下に茅を保管
右上 茅葺きを使う道具や材料も展示
左 葺き替え工事
中の土倉全景



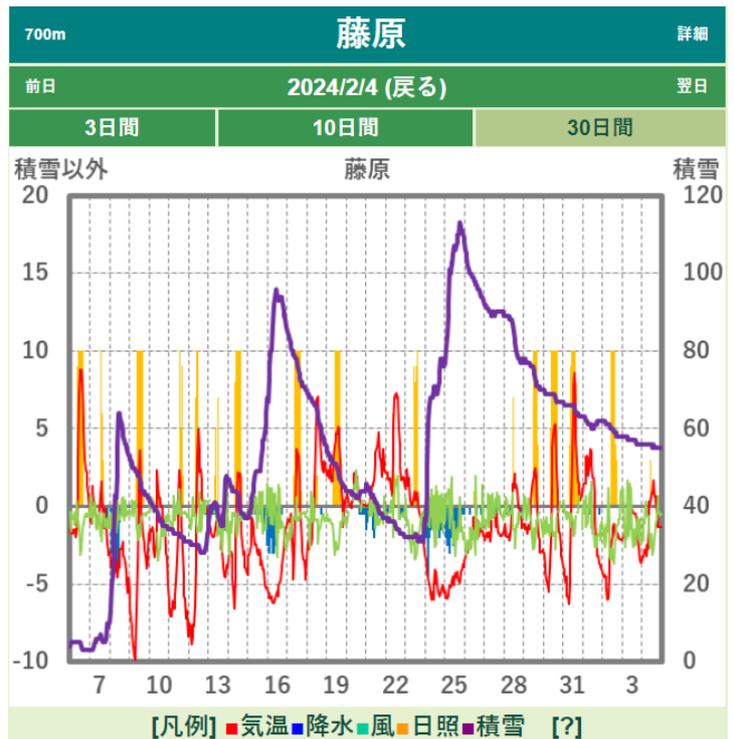
■藤原だより

「年々、少なくなる雪を実感」

塾長 北山 郁人



今年は過去最低の積雪量です。例年12月中旬から根雪になり、年末年始で1m以上の大雪が降るのですが、今年は年が明けた1月7日までは積雪がなく、8日にやっと60cm程度の積雪になりました。その後も瞬間的に1m以上の積雪になりましたが、2月に入り気温の高い日が続き2月中旬で50cm以下の積雪となってしまいました。年々雪が少なくなるのを実感しております。



「こもんずの広場」第2回 —「未来に残したい草原の里100選」のこと—

前回開店した「こもんずの広場」、まだまだ品数が揃いませんが今回は笹岡の数少ない持ちネタの中から「草原の里100選」をご紹介します。

日本に草原は、どのくらいあるのでしょうか？

明治大正期には国土の13%余りが草原であったと言われています。茅葺きの屋根材、田畑に鋤き込む堆肥、牛馬の飼料など草資源は生活の必需品でした。それだけでなく山菜、盆花をはじめ、草原生の動植物は人々の目や胃袋を楽しませ、絵画や文学などにも数多く登場してきました。しかしご存知のとおり、草資源への需要は、生活様式の変化や代替品、輸入品に取って代われ、この50~60年の間に草原は国土の1%未満にまで激減しました。

上ノ原と同様、日本の草原の大半は、火入れ、採草、放牧などの利用・管理で維持される半自然草原です。これらが結構な重労働であることを、上ノ原で実感された方もいるでしょう。しかしこうした手入れを続けることで、人々は草原から毎年持続的に産物やその他の恵みを手に入ってきました。日本の各地の草原には長年にわたる働きかけを通じて経験的に紡がれてきた多くの知識・意識・技術があります。これらを「共創資産」と捉え、日本全体で共有し、活用していくことが、持続可能な自然共生型社会をつくるヒントになると考え、「未来に残したい草原の里100選」が始められました。選考委員長の湯本貴和先生（京都大学名誉教授）は、「草原の里100選は、それぞれの地域が草原を活かした地域づくりを競い合い、その輝かしい成果を顕彰する場とは考えていません。共通の課題を抱える地域が互いの実践やアイデアを学び合い、共に未来に進んでいくための仲間探しの場でありたいと思います。」と述べています。表彰して終わり、ではなく一緒に学び合っていくスタートにしよう、ということなのです。

上ノ原も一昨年の第一次選定で「草原の里」に仲間入りしました。昨年の第二次までに全国48箇所の草原の里が選定され、この春第三次の審査も始まっています。お互いの顔や取り組みを確かめ合いながら少しずつ仲間を増やしていこうという流れです。

これまでの草原の里の一番北は北海道の小清水原生花園(写真・下)、一番南は宮崎県の都井岬(写真・右段上)です。小清水原生花園は、美しいお花畑が有名ですが、近くを走る蒸気機関車の火花が飛んで野



火が度々起こったことで草原が維持されてきたことが解り、今は計画的に火入れ(野焼き)を行い管理するという知恵が生まれたところです。都井岬は野生馬で有

名で、今も多数の野生馬が生息する海辺の草原が広がっています。青水との交流も深い土呂部の茅場(日光茅ボッチの会、写真・右下)や、上ノ原のすぐ隣



の玉原湿原(沼田市)も選定されました。大規模な草原は九州の阿蘇くじゅう地域が群を抜いていますが、東日本にも特徴ある草原が多く残されています。今後100選に仲間入りする草原が増えていくことが楽しみです。

「百名山」ではありませんが、全国の「草原の里」を巡って草原の景観や動植物を楽しみながら、草原の維持管理を行う地域の取り組みを学び合っていくことも、上ノ原の茅場とそれを活かす暮らしを次代に引き継いでいくヒントになるのではないのでしょうか。(笹)



参考：草原の里100選・選定地一覧

https://sato.sogen-net.jp/?page_id=462

第一次選定の草原位置図 (34地区37草原)



編集後記

『茅風』No. 71号をお届けします。

上ノ原の茅の嫁入り先、つくば市の平沢官衙遺跡での茅葺き見学会に行ってきました。この地域は霞ヶ浦に注ぐ桜川の流域ですが、霞ヶ浦は常陸利根川を経て、最下流部で利根川の本流と合流しているため、利根川水系に含まれています。さすがに流域面積日本一の川です。

これからも、日本一の大利根川の最上流域で活動していることの意味を忘れずに、上ノ原の保全と活用のために、汗を流したいと思います。(稲)